

高校生を対象とする性教育と今後の取り組みに関する文献検討

富山 美佳子

足利工業大学看護学部基礎看護学

要 旨

【目的】 思春期はライフステージの中において、男女共に性行動体験率の急激な変化の時期であり、正しい知識を得ることが重要な時期である。また、近年情報化が急速に進み、マスコミでも雑誌でも性に関する情報は身近にあり、正しい情報選択をするための能力を獲得し得ぬうちに、氾濫する情報に巻き込まれている現状があるといえよう。健やかな性の発達に欠くことができない高校生を対象とする性教育の現状と今後の取り組みについて検討することである。

【方法】 思春期（高校生）の性・性問題・性行動・性教育に関する文献を「CiNii」および省庁刊行の白書および公的機関の保健統計調査を系統的に検索・検討した。

【結果・結論】 高校生の性の問題は、保健予防政策で注目されていた感染症や妊娠中絶の問題にとどまらず、最新の調査データから、性に対する関心がない子どもたちが増加していることや、性行動や性的関心についても二極化があることが明らかとなった。これまで思春期の性問題とされていた事柄に加え、新たな支援の必要性が検討されるべき過渡期に差し掛かっていることが考えられた。「健やかな性を育む」ためには、幼少期からの漸進的な性教育の構築と充実を目指す必要があると示唆された。

キーワード： 思春期，性教育，性問題，性発達

I. はじめに

日本社会の中では、性「セックスに関する事柄」に関することは長い間タブーとされてきた歴史がある。その中で性教育が教育制度として位置づくようになったのは1947年1月、文部省社会教育局が各都道府県あてに「純潔教育の実施について」¹⁾ という通達を出したことに端を発する。山本ら²⁾ は性教育の歴史の変遷について文献検討をおこない、わが国の性教育は道

徳的な側面が強調された時代、生理的側面が強調された時代を経て変化し現在に至ると整理している。1999年文部省が「学校における性教育の考え方・進め方」を刊行し³⁾、性教育の基本的な目標として「男性または女性としての自己の認識を確かにさせる」、「自己尊重、男女平等の精神に基づく豊かな男女の人間関係を築くことができるようにする」、「家庭や様々な社会集団の一員として直面する性の諸問題を適切に判

断し、対処する能力や資質を育てる」、を挙げた。そして当時直面する性の諸問題として重要課題であった、HIV・AIDSについての予防教育（以後エイズ教育とする）が重点的に実施されるにいたった。エイズ教育にあたってはその背景から、同性愛や性交の問題も関与しており、指導要領の範疇を逸脱せず必要な知識を教授する難しさが、指導者の性意識や教育姿勢などが問われる状況にあった。

そしてそのような中 2000 年の「思春期のためのラブ&ボディ book」の回収・絶版をはじめとした、「性教育バッシング」の動きがあらわれ³⁾、2003 年の東京・H市の養護学校での“行き過ぎた性教育”⁵⁾に対して行政的な介入がなされ、世論も乗じ規制が実施された⁶⁾。学校現場ではそれらの社会的な動きに反応し、性教育実践に対する戸惑いが助長され、今なお続いている。

近年新たな性感染症の出現や若年感染者の増加⁷⁾が問題とされ、また若年層の妊娠・出産・中絶⁸⁾の増加も同じく挙げられている。急速な情報化社会が進み、携帯電話や IT 機器の普及に伴い若年層保有者も右肩上がりに増加している。子どもたちがいわゆる性情報に接する機会も増加し、アダルトサイトなどのアクセスも含め出会い系サイトなど、性活動の活発化をもたらす要因や性犯罪に巻き込まれる危険性も含め⁹⁾危惧されている。わが国では 2001 年より厚生省が「健やか親子 21」¹⁰⁾ 政策の中で「思春期の性感染症を減少させる」「思春期の望まない妊娠を減少させる」を目標とした取り組みが開始され、思春期における性教育は社会的にも注目をされている。しかし、性教育はその重要性が社会的に認知されているにもかかわらず、安定した教育がなされていないという問題がある。

II. 目的

高校生は身体的に第二次性徴期が完了する時期であり、男女ともに性行動体験率の上昇がみられる。健やかな発達に欠くことができないこの時期の性教育の現状を分析し、課題を明確に

するとともに、今後の取り組みについて示唆を得るべく検討をすることである。

III. 方法

思春期・高校生に対しての性教育の現状に対する文献に関し、1995 年～2013 年の間に発表された内容を「CiNii」から、キーワード：（思春期・高校生 and 性教育 / 思春期・高校生 and 性問題 / 思春期・高校生 and 性行動）を条件に抽出し 132 件の文献を得た。それらの文献および、省庁刊行の白書および公的機関の保健統計調査を系統的に検索した。

IV. 結果

1. 高校生の性に関する社会的傾向

以前より青年期の「性」はもはや特別視したり隠ぺいする必要のない経験として、2001 年調査研究の結果を整理し原¹¹⁾は「青少年の日常生活の中に組み込まれつつある」とし「性の日常化」とも呼ぶべき現象を指摘した。高校生の性規範に関する意識調査^{12)~14)}では、高校生の性交や出産について肯定する意見が大半を占め、学年が進むにつれて増加する傾向にある。平岡は¹⁵⁾「高校生の考えはセックスについては条件が整えば、中高生であっても問題ないと考えている」と述べている。性交の経験率は、2008 年度の東京都幼小中高心障性教育研究会の調査では、中学 3 年生の性交経験率は男子 5.5%、女子 8.3%であり、高校 3 年生では男子 47.3%、女子 46.5%と過半数近くに達し¹⁶⁾ている。また他の調査¹⁷⁾でも高校の 3 年間における性交経験率はおよそ 3 倍となり女子が男子を上回る値を示している。女子の性行動の活発化について石濱は¹⁸⁾、「成長促進、成熟加速など、肉体的、機能的発育や医学の進歩に伴う妊娠や性病からの解放によって、純潔、処女性に対する価値観の変化」を挙げており、男女平等意識が高揚し、女性の高学歴化や社会的進出が目立ち、男女交際においても女性の積極性が目立ったためだと分析している。

「性の日常化」は、青年期の性交を青年一般が容認する意識が高まっていることに起因するものに他ならない。しかし、詳細な分析をする

と性の規範に対する意識は一様ではない。2011年度の第7回青少年の性行動全国調査報告¹⁹⁾では、「性の分極化」を指摘している。これは、「性的関心」「性交経験」「性規範」に分極化があるとするものである。現代における若者の多数派は、愛情の伴わない性交やモノガミー規範から逸脱することに否定的であり、性交相手も現在の交際相手に限られている者がほとんどで、避妊に対しても積極的で「常に避妊をする」行動がとられている。ただしその行動の起因するところは、正しい知識を獲得したことによるものではなく、予定外の妊娠への忌避感の増大があり、この群では妊娠先行型結婚についても否定するものが増えていた。これより現代の若者の多数派は、性に対しまじめで慎重な態度を持っているともいえるのである。その一方で、性規範が緩やかで初交年齢が低く性交人数も多く、積極的に出会いを求める性的に活発な者がみられる。この群の中で少数ながら着目されるのは高校生女子であり、彼女らは5割以上が15歳以下で初交を経験しており、2割がこれまでに5人以上の相手と性交を経験していた。そして「不十分な避妊」を行い、避妊しない理由を「生む(生んでもらう)つもり」と回答した。10代の妊娠・出産・育児には医学的にも問題点²⁰⁾が指摘されるとともに、若年者の妊娠・出産はDVの誘因²¹⁾、乳幼児の虐待のリスク因子²²⁾になるなどの問題も指摘されている。この群は性に関する関心が低く、性知識も不足していると言える。この群に特徴的な価値観では、無防備な性交の結果若年で妊娠をしても、それは「望まない妊娠」ではなく「『生む(生んでもらう)つもり』であり出産につながるから問題ない。」と考えるのかも知れないと分析されている。しかし前述の通り、若年者の妊娠・出産・育児については様々な問題点が指摘されている現状がある。

性的関心と性行動の関係を検討¹⁹⁾した結果、それらの値は必ずしも相関がみられておらず、「性的関心」が低下しているにもかかわらず性行動が活発化しているという、一見すると矛盾しているようにも感じられる現象が明らかと

なっている。高校生の大きなトレンドとして、男女ともに「関心なし-経験なし」と、「関心あり-経験あり」の群の割合が高まっており、その代わりとして「関心あり-経験なし」群の割合が低くなっている。つまり性に関する発達の段階でいえば、真ん中のグループの割合が低下してきており、青少年の性の二極化が生じてきているとしている。そして全体の傾向は、同調査の7年前の前回調査と比較して、「関心あり-経験あり」群は高校生大学生の男女両方で大幅な割合の低下がみられている。わが国では2000年代後半から恋愛や性行動に消極的な若年男性を指して「草食男子」²³⁾または「草食系男子」²⁴⁾といった表現が使われるようになった。大学生男子では1993年以降、高校生男子では1999年以降、性交経験率が横ばい状態になっているだけでなく、2005年の時点では恋人もなく性交経験もない性行動の「不活発層」が高校生男子では約3分の2、大学生男子では約3分の1存在するという²⁵⁾。性行動の不活発化は男子だけでなく女子においても生じており、特に女子大学生における、近々5年間の性行動への積極性の低下は著しく²⁵⁾、性行動への積極性の低下は男子より女子において顕著だといえる。

そして高校生女子においては、性体験のあるものの性的関心はないとする、「関心なし-経験あり」の群の量的拡大²⁶⁾という奇妙な現象がみられている。考え方によってはセクシャルハラスメントや性的被害などの悪質な体験を想起させるようなデータではあるが、実際にこの群に属する者が、性被害を多く経験しているわけではないことが分析から明らかになっている。同年代の男子からは、このような特徴は検出されていない。この回答の背景について、二つの可能性が示唆²⁶⁾されている。第一は、関心が本当になくというよりはむしろ「関心がある」とは言いたくないという感情が背後にあるというものである。性的に踏み込んだことになれば目をそむけたり、聞こえないふりをしたりするというのは、精神的に未熟な状態での性行動を経験したゆえの反応であるとされている。第二はインターネット等をはじめとする性情報

の氾濫の中で、意識せずとも見聞きする情報に対して、その日常性ゆえに関心をなくしているのではないかという分析である。いずれにしてもこの群は、性的関心の低さゆえに正しい性知識を得る機会が少なく、それと相反して体験が先行することにより、危険な性行動をとることが危惧される群とされている。

2. 思春期における人工妊娠中絶

思春期における人工妊娠中絶年齢ごとの推移は、総数としては減少傾向にありながら、高校の3年間でおよそ3倍となる性体験率と関連して、人工妊娠中絶数は年間約1,000件弱から5,000件弱への増加が報告²⁷⁾されている。このことは適切な避妊がなされていない性行動に起因するものと推察されている。高校生の性が日常化する一方、中・高校生が習得している避妊情報の怪しさや乏しさと、不確実な避妊の関係性が懸念されている。そして妊娠の当事者となる女子高校生の避妊の行動と性知識の関連の検討では²⁶⁾、「不確実な避妊」をする者は、学校での情報より友人や交際相手経由で避妊情報を得るものが多い。しかし、彼女たちが決して「必ず避妊」する者より性知識が低いわけではなく、知識と避妊行動が結びついていないところに問題点が見いだされている。健康教育分野の基礎理論としてよく知られるKAP(KAB)理論があるが、とりわけ女子の避妊行動に関しては、正しい知識(Knowledge)があっても大人たちが望ましいと考える態度(Attitude)や習慣(Practice)・行動(Behavior)につながっているわけではないことが確認されている²⁸⁾。2010年の「健やか親子21」政策の第2回中間報告では、²⁹⁾10代の人工妊娠中絶実施率は、策定時の現状値から直近値まで着実に減少しているとし、減少の背景として性交頻度の減少、経口避妊薬の承認の影響等を指摘しているが必ずしも正確な分析はされておらず、さらなる詳細な要因分析が期待されるとしている。

2011年の青少年白書の分析結果¹⁹⁾では、男子は正しい性知識が確実性の高い避妊行動に結びつきやすいことが明らかにされている。性教育では今後さらに丁寧な指導により知識を定着

させる必要がある。そして近年女子大生の利用率に上昇がみられるとされている低用量ピルの使用率は、推定で1%³⁰⁾であり諸外国との比較で著しく低い。女性主導の避妊法として知識の提供が検討される必要があると提言されている。

3. 高校生を取り巻く性感染症

高校生の性を取り巻く問題のもうひとつは、性感染症についてである。性感染症の感染拡大に影響を及ぼす因子として「性の自由・多様化」と、疾病の変化としての「性感染症の無症候化」がある³¹⁾。

2001年「健やか親子21」政策策定時のデータによると、10代(15～19歳)の性感染症罹患率調査では³²⁾女子の場合、人口に対する有病率は19%であった。2006年第1回中間評価³³⁾で示された思春期性感染症(STD)報告数年次推移データでは、性感染症は増加しており、今後増加の要因分析調査が必要であるとしていた。2010年第2回中間報告²⁹⁾では、定点当たりの報告件数でみると、第1回中間評価時から減少している。ただし、感染症発生動向調査の報告件数は医療機関の受診件数であり、その評価については受療行動の影響を受けるため、留意が必要であるとしている。無症候性の性感染症が臨床的に増加傾向にある現状では、臨床における定点の調査のみでは潜在する感染者の全容は明らかになっていないということであり、データ上減少傾向であっても実質の感染者はその何倍にも上ることが推測されている。

V. 考察

高校生の性の現状は、性行動の低年齢化、性感染症の蔓延、望まない妊娠など決して明るいとはいえない。しかしそれは突然変異で起こったものではなく、元をたどれば私たち大人が築いてきた時代の影響を受け、育った結果であり、そうした潮流に巻き込まれている子どもたちは被害者と言えるかもしれない。高校生の現状に合わせ、成長途上の彼らがこれから青年期・壮年期と健全な成長と発達をし、それぞれが幸せな人生を送るための素地を築く上で何をどのよ

うに教育することが必要とされているのかについて考える。

1. 社会的環境側からの検討

高度情報社会は、ICT（情報通信技術）の発達を促し、インターネットと電子メールを通じ、あらゆる情報が即時に世界の隅々まで、様々な人のもとに届くようになり、しかも一方通行ではなく、双方向的コミュニケーションが可能となった。パーソナルコンピューターや携帯電話の普及率を考えても、今やICTが日常生活に欠かせないものであるとは言うまでもない。

2004年の調査³⁴⁾では、情報機器を所持している高校生のほうが、性行動も活発である。「出会い系サイトを利用したことがある」と答えた者は全体の22.5%を占め、性被害に巻き込まれる危険性も高い。近年、義務教育以前のICTリテラシー教育³⁵⁾も積極的になされるようになり、その影響も調査研究³⁶⁾されている。高度情報社会の進化に伴い、情報社会の危険性やモラルに対する安全教育が必要である。そのため情報モラル教育の重要性³⁷⁾も相関して発達することが肝要であると考えられる。

思春期の若年者にとって情報化社会の中、氾濫する性情報の中から、性に対する正しい情報を判別することは、必ずしも容易ではない。健全な発達の過程として性に対する興味が芽生え始める思春期において、数多くある情報の選択・判断の方法を学ぶ機会を得ることは不可欠であり、今後要点を置き検討される必要があると考える。

2. 指導者側からの検討

学校現場での性教育の現状は、98.4%の教員が「性教育は重要だ」と回答しているものの、自分で実施した教員は30%と少なかった³⁸⁾。佐藤ら³⁹⁾によれば、教員の性教育上の問題意識として「時間が取れない」「どこまでどう扱っていいかわからない」「年代によって性に対するマイナスイメージがある」等があげられており、教育現場において性教育を推進していくうえでの課題や教員間の性に関する意識に差異があることがうかがわれる。

学校教育における性教育の位置づけは依然と

して明確でなく、調査によれば⁴⁰⁾、小学校においては学級活動、体育科、道徳の授業を中心に実施されており、主に学級担任が指導しているが、養護教諭とのティームティーチング(TT)を行っている学校も多い。中学校では、保健体育科、学級活動、道徳の授業を中心に実施されており、それぞれ、教科担任、学級担任が指導にあたっていた。高等学校においては小・中学校と比較して、外部講師による講演会・講話を実施している学校が多いのが特徴的である。これらの結果をふまえて考えても、継続的な教育は保健体育の授業のみに依存している傾向が現状であるといえる。「保健」を担当する保健体育科の教員の多くは、スポーツの専門家であり「雨降り保健」と揶揄されるように性教育を含む保健教育に必ずしも積極的でない場合も多い⁴¹⁾とされる。

性教育を進める上での指導者側から見た課題としては、「教材や情報が少ない」ことや「研修会が少ない」ことがあげられる。性教育の効果的促進のために、教員の多くは専門性のある学外講師の協力が必要と考え、その結果として、高等学校における性教育実践⁴⁰⁾の現状が、外部講師による講演会講話といった単発的な活動が主体となっている。北村⁴²⁾は「思春期の子どもたちが性に悩んでいるというのが、実は悩まされているのではないか」という。親や学校や社会が、個々の子どもたちの成長や関心事に合わせて、必要な情報を必要な時期に科学的・具体的に提供できていれば悩む必要はなくなるのであるとするならば、学校から教育支援の依頼を受けた専門性のある者は、講演や単発の研修の連携にとどまらず、継続した教員研修の開催やそれに続けての教員に対する資料提供やアドバイザーとしてのアプローチなど、継続したサポートをすることが、課題の方策となりうるのではないかと考える。8割以上の高校生が高校生のセックスを受容している現在、“高校生はセックスしてはいけない”という規範はすでに機能しなくなった。「いずれわかる」「寝た子を起すな」といった考えや、「伝え方が分からないから触れない」では済まされない現状が

ある。適切な時期に適切な内容を、正しく彼らが理解できるような方法で指導されるべきである。

3. 生徒側からの検討

1) 性行動の低年齢化について

性行動の低年齢化を問題にする背景には Hassan ら⁴³⁾ が指摘するように、10代の性行動には、発達段階における標準的な出来事としての位置づけと、性感染症・HIVなどにより健康を害するリスクの高い行動という2つの側面があり、後者の立場に立てば、可能な限り回避すべきと考えられる。他の研究でも、初交経験年齢が低いものほど、初交時避妊の実行率が低く⁴⁴⁾、のちに複数のパートナーと性的関係を結んでいく傾向がある⁴⁵⁾とわかっている。

若年者の妊娠・出産をする群に特徴的な価値観では、無防備な性交の結果若年で妊娠をしても、それは「望まない妊娠」ではなく『生む(生んでもらう)つもり』であり出産につながるから問題ない。」とする意識があり、この問題意識の差異が、若年者の精神的・社会的な未熟さに起因し、適正な判断がなされないとするならば、この群に対しての教育的な介入が必要となると考える。林²⁶⁾は生まれ年によって分けた「出生コーホート」の分析をしている。その結果から、高校生女子の性交経験が時代とともに増加してきた様子が明らかであり、性の日常化は主に高校段階で生じている⁴⁶⁾ことであるといえる。高校生に対する性教育は、時機の上でも効果的であると考えられる。

2) 性的関心と性交経験について

わが国では、1974年からほぼ6年間隔で継続調査されている「青少年の性行動全国調査」をはじめとした調査において、性の日常化や性行動の低年齢化がいわれ続けていた。しかし最新2011年第7回調査で調査開始以来初めて、青少年の性行動体験率の低下傾向が報告された。産婦人科臨床に長年携わる秋元は⁴⁷⁾、「近年の若者は現実につき合うということなしに、日々を過ごしているのではないと思われる。SNS、二次元の世界に浸って居心地の良い、すぐに離れても構わないような擬似的関係に慣れ

てしまえば、生身のつきあいは非常に濃厚すぎる。また家庭でも学校でも子どもに失敗をさせないように、嫌な思いをさせないように腫れ物に触れるような関わり合いが増えている。」と指摘している。少子化の中、そのような環境で育った若者が、今までと変わった価値観を獲得し成長しているということは得心のいくところである。

林²⁶⁾は具体的に、性的関心の有無と性交経験の有無により4つのグループ「(性的)関心なし- (性交)経験なし」群、「関心あり-経験なし」群、「関心なし-経験あり」群、「関心あり-経験あり」群に分類し、検討を行っている。その結果、高校生の男女とも前回調査との比較では「関心なし-経験なし」群と「関心なし-経験あり」群の割合が高まっており、「関心あり-経験あり」群は前回調査から大幅に割合が低下している。総じて高校生の性的関心には低下の傾向があり、このことは健康な発達過程とは言い難く、少子化・晩婚化と言われる現在の社会問題にもつながる課題であると考えられる。これからの世代を担っていく子どもたちが、性に関心がなく性関係も希薄になっていくとしたら、人工妊娠中絶率は低下するかもしれない。しかしそれでは健全な発達とは程遠く、本末転倒となってしまいかねない。

高校生が異性につき合うことは、性行動が活発化するのに伴い逸脱行為の経験が増えるなど、問題が指摘されることもある。しかしその一方で、性行動に積極的な者は高校生活の満足感が高く、さまざまな場面で自己発揮し、将来に明るい未来を予測し、社会的達成意欲も高いことも見出されている⁴⁸⁾。高校生が異性につき合うことは、心理的な安定を生み出す効果を持っているといえる。正常な発達過程として、生徒が異性に関心を持つことを、同性の友だちの延長線上にごく自然な行為として育てることができるよう援助が望まれると考える。そして多くの高校生が、学校に性知識や避妊情報を依存している現状²⁸⁾において、基本的な知識を習得すること、また性別にかかわらず

すべての者が主体的に確実性の高い避妊方法を選択・実行でき得るため指導内容のさらなる検討が必要となると考える。そして低用量ピルの普及率も諸国と比べ著しく低い³⁰⁾ことがわかった。今後低用量ピルについて副作用とともに正しい知識を与えることも必要であると考ええる。

自分の愛する人の子どもを生む、あるいは生んでもらい、子育てをしていくことの楽しさ素晴らしさ、家族の大切さを伝えることも性教育には含まれるとしたら、“人間教育”の範囲にまで及ぶものとなる。就学年齢の生徒の性教育すべてを学校教育に依存してきた点を改め、性教育における家庭・学校・地域の役割分担を明確にし協力し合えるとともに、規範意識など個々の生徒に対する指導の工夫も必要になるであろう。

狭義の性教育とでも言うべき、性と生殖、性感染症の理解予防の内容については、段階的漸進的な教育計画を作成する必要があると考える。高校生以前に性と生殖に関する基礎的な知識修得する必要があると考える。高校生の性教育は社会的・環境的な要因を受け、その時代により「現状」が変化することがわかった。高校生を対象とする性教育はその時機やトレンドの把握に努め、具体的な方法を検討し続けることが肝要である。何よりも性については、まず教師や親など大人たちが変わることが、子どもの課題を解決していくことにつながると考える。

VI. おわりに

1. 性の日常化は高校生で起きているといえる。
2. 性感染症の罹患・望まない妊娠の問題は継続されてある。
3. 若年妊娠者の中には若年妊娠であることの、問題意識を持っていない者もいる。
4. 高校生を取り巻く環境の変化に伴い ICT リテラシー教育が急がれる。
5. 性に対する関心がない者が増加している。
6. 高校生の性意識や性行動はさまざまな要因を受け変化する。

これまで高校生の性的な問題は、性行動の

低年齢化や、性感染症の罹患状況にあることとされていた。しかし性に対しての関心が低下しているものが増えつつあり、健やかな性発達という観点からすると由々しき事態であると考ええる。

思春期の性教育は状況・環境変化も著しく、これまで問題と言われてきたものに代わり新たな支援の必要性が検討されるべき過渡期に差し掛かっているのかもしれない。これまでなされてきた性感染症予防や、人工妊娠中絶率の低下に代表される「危険回避の性教育」のみならず、性的に健康な人生を支援するためにも、思春期を対象とした性教育は「健やかな性を育む」幼少期からの漸進的な構築と充実が求められると考える。

今後、発達段階に即した具体的な指導内容や教材を整理し、その系統性や他教科間の関連性について研究を進めていきたい。

文献

- 1) 日本性教育研究会刊 (1971) : 性教育に関する文部省関係資料 - その 2 -.
- 2) 山本信弘、大道乃里子、戸田百合江 他 (1991) : 性教育の歴史的変遷の文献的一考察、大阪教育大学紀要第 V 部門、39(2)、203 - 215.
- 3) 茂木輝順 (2007) : 戦後日本における性教育の手引類及び実践計画の変遷に関する研究～性教育学習指導案データベースを通して～、教育とジェンダー研究、7、47-56.
- 4) 浅井春夫、北村邦夫、橋本紀子 他 (2003) : ジェンダーフリー・性教育バッシング ここが知りたい 50 の Q & A、大月書店、東京.
- 5) 島崎継雄 (2006) : 性感染症における最近の話題「性教育の現状と今後の課題」、産婦人科治療、92 (5)、817-821.
- 6) 高橋史朗 (1994) : 間違いだらけの急進的性教育、254、黎明書房、名古屋.
- 7) 熊本悦明、塚本泰司、杉山徹 他 (2004) : 日本における性感染症サーベイランス -2002 年度報告 -、日本性感染症学会誌、15(1)、17-45.

- 8) 戸田稔子、河野美江、比良静代 (2004) : 若年妊娠の臨床的検討リプロダクティブ・ヘルスの立場から、思春期学、22(3)、392-397.
- 9) 財団法人日本性教育協会 (2007) : 「若者の性」白書、小学館、東京.
- 10) 厚生労働省 (2001) : 健やか親子 21 第 1 回全国大会、<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/taikailst.html>、(検索日 2012. 8)
- 11) 原純輔 (2001) : 「青少年の性行動全国調査」が問いかけるもの、財団法人日本性教育協会編、「若者の性」白書第 5 回青少年の性行動全国調査報告、7-22、小学館、東京.
- 12) 家庭問題研究所 (2003) : 平成 14 年度青少年の性意識と性行動に関する調査報告書.
- 13) 齋藤益子、木村好秀 (1999) : 高校生の性意識と性行動に関する実態調査、思春期学、17(2)、263-271.
- 14) 日本産婦人科医会群馬県支部・ぐんま思春期研究会 (2007) : 群馬県における高校生の性意識・性行動に関するアンケート調査.
- 15) 平岡友良 (2003) : 高校生の性および性教育に関する意識調査、思春期学、21(2)、192-199.
- 16) 東京都・幼・小・中・高・心障性教育研究会 (2008) : 日本家族計画協会、東京.
- 17) 東京都小学校・中学校・高等学校の性意識・性行動に関する 2005 年調査報告 (2005) : 児童・生徒の性意識調査、学校図書.
- 18) 石濱敦美 (1994) : 性保健学、59、メディカルカルチャ、東京.
- 19) 日本性教育協会編 (2013) : 「若者の性」白書第 7 回青少年の性行動全国調査報告、小学館、東京.
- 20) 定月みゆき (2009) : 若年妊娠・出産・育児への対応、母子保健情報、(60)、53-58.
- 21) 内閣府男女共同参画局 (2007)、「男女間における暴力に関する調査」報告書、7-8.
- 22) 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会 (2008) : 子ども虐待による死亡事例等の検証結果総括報告、39-41.
- 23) 深澤真紀 (2007) : 平成男子図鑑 - リスペクト男子としらふ男子、日経 BP 社、東京.
- 24) 森岡正博 (2008) : 草食系男子の恋愛学、メディアファクトリー、東京.
- 25) 片瀬一男 (2013) : 第 7 回「青少年の性行動全国調査」の概要、「若者の性」白書第 7 回青少年の性行動全国調査報告、9-24、小学館、東京.
- 26) 林雄亮 (2013) : 青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度、財団法人日本性教育協会編、「若者の性」白書第 7 回青少年の性行動全国調査報告、25-41、小学館、東京.
- 27) 母子衛生研究会編 (2012) : 母子保健の主な統計 平成 23 年度版、母子保健事業団.
- 28) 土田陽子 (2013) : 高校生大学生の避妊に関する意識と行動 - 避妊行動の分化に着目して -、財団法人日本性教育協会編、「若者の性」白書第 7 回青少年の性行動全国調査報告、121 - 139 小学館、東京.
- 29) 厚生労働省 (2010) : 健やか親子 21 第二回中間評価報告書、http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/tyuukannhyouka_houkoku2.html (検索日 2013. 11).
- 30) 国連人口基金東京事務所 (2003) : 世界人口白書 (日本語版)、<http://www.unfpa.or.jp/cmsdesigner/data/entry/publications.00038.00000026.pdf> (検索日 2013. 11).
- 31) 熊本悦明 (2001) : 日本における性感染症の流行 - 若い女性を中心としたクラミジア感染症大流行の実態 -、総合臨床、50 (10)、2676-2685.
- 32) 熊本悦明 (2001) : 女性優位の STD 時代 STD の最近の動向、臨床婦人科産科、55(1)、10 - 18.
- 33) 厚生労働省 (2006) : 健やか親子 21 第一回中間評価報告書 : <http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/mokuhyou1.html> (検索日 2013. 11).

- 34) (財)兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所(2004): 青少年の性意識と性行動に関する研究報告書、兵庫県。
- 35) 片岡麻實: デジタル・ネイティブな子供たちと教育 <http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/Watcher/20120523/398607/> (検索日 2013. 11)
- 36) 中村恵(2008): 幼稚園における ICT リテラシー教育が子どもに与える影響について、発達研究: 発達科学教育センター紀要、22、49-58.
- 37) 総務省 北陸総合通信局(2007): 子供を見守る ICT 技術に関する調査検討会～小電力データ通信による安心・安全な子供の環境整備に向けて～報告書。
- 38) 群馬県教育委員会(2006): 平成 17 年度性および性教育に関する意識調査結果報告書。
- 39) 佐藤喜根子、堀川悦男、片岡千雅子 他(1997): 仙台市内での性教育の現状と性教育に対する教員の意識、東北大学医療技術短期大学部紀要、6(2)、121-130.
- 40) 石川裕子、上甲廣文、光宗勝次 他(2006): 学校における性教育の指導に関する調査・研究 - 現状と課題 -、愛媛県教育センター教育研究紀要、72、102 - 108.
- 41) 橋本紀子(2011): 「青少年の無防備な性行動と性教育の課題. 日本の性教育」こんなに違う世界の性教育、227-247、メディアファクトリー、東京。
- 42) 北村邦夫(2013): 思春期の性の悩みに大人はどう答えるか、教育と医学、6(8)、686-689.
- 43) Hassan, EA, Creatas, GC (2000) : Adolescent sexuality: a developmental milestone or risk-taking behavior? the role of health care in the prevention of sexually transmitted diseases、Journal of pediatric and adolescent gynecology、13(3)、119-124.
- 44) 永田夏来(2007): 性行動の変化と避妊の実行状況、財団法人日本性教育協会編、「若者の性」白書第 6 回青少年の性行動全国調査報告書、101-119、小学館、東京。
- 45) Takakura. M, Wake. N, Kobayashi. M(2007) Relationship of condom use with other sexual risk behaviors among selected Japanese adolescents、Journal of adolescent health、40(1)、85-88.
- 46) 原純輔(2007): 「青少年の性行動全国調査」とその 30 年、財団法人日本性教育協会編、「若者の性」白書第 6 回青少年の性行動全国調査報告書、7-21、小学館、東京。
- 47) 秋元義弘(2013): 思春期の生徒性感染症の予防、教育と医学、6(8)、691-699.
- 48) 三枝恵子(2005): 子供の規範意識 - 高校生の性意識と規範感覚 -、CS 研レポート、55、22-26.

The study of the literature about hereafter coping with the sex education to high school students

Mikako Tomiyama

Division of fundamental nursing, Department of Nursing, Ashikaga Institute of Technology

Abstract

[Purpose] Puberty is an important time to obtain the correct sexual information, in life stages, for both sexes, in which the rapid change of the rate of the sexual behavioral experience. Also, recently information-oriented social environment is developing rapidly, in the form of mass-communication, internet, magazines, the information about sex is around them, we can say, the present state is that the flood of that makes them drowned, before they obtain the ability to select correct ones. The present state of and hereafter coping with the sex education to high school students are studied, needed for the healthy sexual development.

[Method] Books about sex, sexual problems, sexual behaviors, sex education of puberty, and the government report published by the Ministry, or the health statistics investigation by the administrative organizations were systematically referred and studied with “CiNii”.

[Result and Conclusion] The sexual problems of high school students are not only the problems of sex infections and abortion that is noticed in the health prevention policy, but from the data gained by the most recent investigations, it becomes clear that the children who have little interest in sex are increasing, or they have the bipolar attitude about the sexual behaviors and interest. Adding to the problems of puberty that have been thought so far, it is considered that there are bound to be a transitional time in which a new support for them should be studied. It is suggested that “to bring up healthy sex” gradually proceeding sex education from the infantile period needed to be built and enhanced.

Key words: puberty, sex education, sexual problem, sex development